

「根本的の手術」は可能か ——『明暗』の展開

藤尾健剛

Is 'the Fundamental Operation' Possible? ——The Construction of Meian (Light and Shade)

Kengo Fujio

周知のように、小宮豊隆と唐木順三によって、『明暗』(大5・5・26～12・14)第一回に描かれた診断の場面の象徴的意味合いが注目された。小宮はこの一節が、『明暗』一篇のキイノートの役目を勤めてゐる」と指摘し、入院中の津田を描く「描写の大部分」は、「津田の精神、上の病気が、如何なる深所にその病根を持ち、如何なる徴候に於いてそれが現はれ、如何に進展し、如何に『根本的の手術』を必要とする状態にあるかを、委曲を悉して描き出す事の上に、向けられてゐる」(傍点原文)と述べている。唐木も、『明暗』一篇は津田の精神更生記であることが、その第一節において約束された^②と述べている。両者とも、津田の抱える精神の病に対する手術を『明暗』の眼目と見ている。だが、小宮の論は、津田の精神がどのような「病根」を抱えているかを必ずしも明確にしていけない。唐木の方は、「津田がここで自然の論理に気がつくかどうか。自分が我といふものに虜にせられた人形であることに気がつくかどうか。そこに津田が更生できるかどうかの鍵がある」と述べて、病根の所在を明確に指摘している。しかし、これでは、一介のサラリーマンにすぎない津田に、晩年の漱石と同水準の認識がないことをもって「病氣」と見ていることになりかねない。私たちの大部分が病者の宣告に値するに違いない。唐木説を受けた平野謙が、津田のような「軽薄な男の『心機一転』や『精神更生』は到底考えられない」^③と述べたのももつともである。津田の肉体は痔疾を患っていたが、精神の病もこれに対応して、奇病・難病の類ではなく、卑近でありふれたものに違いない。

津田の精神に加えられる「手術」の性格について、梶木剛は、「津田の精神をめぐる日常的水面の『奥』に分け入るものである」と指摘している。病根が具体的に何を指すかについては賛成できないが、病根の所在と性格に関する梶木の見解は的確だと思う。平凡な日常の水面下であつて、静穏であるべきその生活に波瀾を惹起するもの、あるいはその予兆を孕むもの、——津田とお延の夫婦が抱えるそのような問題こそが、「手術」されるべき病根であろう。『明暗』がごく平凡な生活者を拉して主人公とし、金銭に関わるトラブルや夫婦の愛情問題など、卑近で日常的問題を扱っていることを銘記すべきである。

内田道雄は、『明暗』を「津田の精神更生記」とする唐木の見解を否定して、「一对の夫婦の間に愛が可能であるか、可能であるとしたら如何なる愛が可能であるか、という問題意識が、この作品を貫流している」と述べている。内田が唐木説を否定する根拠は、唐木の重視する「継続中」(『硝子戸の中』三十、大4・2・14)の認識と、『治癒』とか『更生』とかいう考え方が矛盾する点にある。もつともだが、患部を「切開」すること「天然自然」の療治が可能とする、冒頭の医師の診断が津田の精神の「手術」にも適用しうるとすれば、『明暗』の作者は「継続」を断ち切る可能性を信じていたと考えるべきであろう。「継続」の断絶が可能だとすれば、「治癒」や「更生」を否定する根拠を失うことになる。とすれば、内田説と小宮||唐木説は両立可能である。津田とお延は、時代に先駆けて恋愛によって結ばれたカップルだが、必ずしも幸福な状態にない。彼らが問題を抱えていることは、周囲の人々の異口同音に指摘するところである。津田とお延を手術台に載せて、これを治療することによって近代的な結婚のゆくえを占おうとするところに、この作品の狙いの一つがあるのは確実である。

もつとも、『明暗』の主題がそれに尽きているわけではない。そもそも近代的恋愛のたどる運命という主題は、当時の一般読者にとってあまりに特殊なものと言わざるをえない。大正四年の「断片」(六八A)に、「小説、ノ尤モ有義ナル役目ノ一ツトテ、particular caseヲ general caseニ reduce スルコト、(中略)吾人ハ affectノ為ニ然スルノミナラズ、人道ノ為ニ然セザル可ラズ」の一節がある。類似した内容の記述は、当時の他の「断片」(六五・七三Aなど)にも残されており、晩年の漱石が深いこだわりを示した小説観であったことは確実である。『明暗』は、特定の階層に属する、特定の人間の運命を描きながら、そのことが同時に万人に通ずる普遍的な主題を追究することにもなるような性格を備えた小説なのである。このように言えば、いわゆる本格小説全般に共通する特徴にすぎないと受けとられかねないが、『明暗』の場合は類例のない方法で本格小説と同じ課題を達成している。詳しくは本論を参照されたいが、主人公の抱えている問題自体が階層化されているのである。上位に位置するのは特定の集団にしか適用されない問題だが、下位に位置づけられた問題は、ほぼすべての人々に関わる普遍的な射程を備えている。下位の問題を放置したまま上位の問題に対処しようとしても、十分な解決になりえない。主人公が自己の属する集団に特有の課題を解決しようとするなら、ぜひともその基底に横たわる普遍的な課題に取り組み必要がある。——このような形で、この小説はあらゆる読者に喫緊の課題を突きつけ、その解決のた

めの示唆を与えようとするのである。「人道ノ為ニ然セザル可ラズ」の一句は空虚な放言ではない。

一

すでに梶木剛によつて注目されているが、手術後の津田に患部の筋肉が収縮する現象が起こる。第一回の収縮は、手術後、岡本からの誘いに応じてお延が劇場へ駆けつけるのを送り出した直後に生じた。二度目の現象は、お秀が兄を見舞うために病室に顔を出し、「あたし少し兄さんに話したい用があるんです」（九十二）と切り出した直後である。津田は、盆暮のボーナスの中から一部を償還するという約束のもとに、父親から月々の補助を受けていたが、約束を履行しなかつたために、送金を止められたのだつた。補助の約束は、お秀の夫堀が仲介して成立していたため、お秀がやつて来たのである。三度目は、留守中に小林が押し掛けて来て、お延を相手に話し込んでいるのを聞いたときに生じる（九十九）。小林の口から清子に関する過去がお延に漏れるのを恐れたために生じたものようだ。収縮が起こると、津田の「意志は其局部に対して全く平生の命令権を失つてしまふ。止めさせようと焦慮れば焦慮る程、筋肉の方で猶云ふ事を聞かなくなる」（九十三）。

「収縮」に関して注目しなければならないのは、第一に、それが津田の「意志」のコントロールを越えている点である。「右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりする」「暗い不可思議な力」（二）を想起させる。第二に、「収縮」はいずれも津田の精神が動揺や混乱に陥つたときに生じている点である。肉体と精神のあいだの微妙な相関関係を暗示する現象である。肉体と精神のアナロジーが『明暗』全篇を貫いているという想定に立てば、三回の筋肉の「収縮」は津田の精神が抱えた病根の所在を示唆するものと受けとるべきであろう。第三に注目したいのは、一度目と二度目の「収縮」のあいだには時間の隔たりがあるが、同じ第九十三回に同時に言及され、三度目の現象だけが少し後の九十九回で取りあげられている点である。このことは、最初の二回の「収縮」で暗示される津田の病根が別個のものでありながら、同一の水準にあるもので、三回目の「収縮」で示唆される病根だけが別の水準に位置することを示すものと考えられる。すでに梶木が注目している箇所であるが、第三百三十四回に、津田の心理に関して、「一皮剥いて奥へ入ると、底にはまだ底があつた」という表現がある。最初の二つの病根自体、日常の水面下の「奥」にあるものだが、第三の病根は、そのさらに「奥」、「奥」の『奥』（梶木）に潜伏していると考えるべきである。

以下、津田の精神を蝕む病根を特定し、それがどのように療治されていくかを確認しなければならない。が、その前に、病根の一般的性格を明確にしておくのが便宜である。医師は、「切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割かれた面の両側が癒着して来ます」（二）云々と手術法を説明している。「切開」によつて「天然自然」に治癒する精神の病とはどのようなものであるうか。ある人物が両立しがたい、矛盾する願望を抱いているとしよう。一方の願望は前に進むことを命じるが、他方は後に退くことを要求する。一方の願望が優勢で他方を押えつけ

ているあいだは、さほど問題は生じない。が、両願望の力が伯仲しているとすれば、その人物の精神の緊張は耐えがたい程度にまで高まるだろう。その人物が平穩な生活を送り続けることを欲するなら、一方の願望を放棄することを選ぶか、対立する二つの願望を和解させることのできるポイントを見出すかのいずれかによるしかないだろう。『明暗』における精神の病根とは、津田が内部に抱えている、両立しがたい矛盾の謂いであると考えられる。「切開」による「手術」とは、内部の矛盾を顕在化させ、相対立する因子のあいだの緊張を高めることを通して、一方を選択することで葛藤に決着をつけるか、両因子を止揚する第三の道を切り開くかのどちらかへ導くことであろう。

以上を念頭に置いて、まず第二の「収縮」によつて暗示される病根（以下、「第一の病根」とする）を検討しよう。先に触れたように、「収縮」は送金の途絶にまつわる問題を引つ提げてお秀が病室に入ってきたときに生じた。お秀は、津田とお延をひつくるめて、「あなた方お二人は御自分達の事より外に何にも考へてゐらつしやらない方だ」、「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂むえさんは又兄さんに可愛がられる丈なんです。あなた方の眼には外に何にもないんです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんもうないんです」（百九）と、彼らの利己的な生活態度を糾弾している。確かに津田はみずからの利益と快楽を何より優先し、親に対する義務だとか親族への義理だとかには無頓着のように見える。世話になつた藤井家の娘を娶ることで恩義に報いようなどという殊勝な心掛けを彼に期待することはできない（二十七）。上司の吉川とつながる岡本家の娘に贈るプレゼントには、「四円近くの代価」（四十六）も惜まないが、藤井の息子の欲しがる七円五十銭の模型自動車やキッドの靴を買い与えることには、その日の懐具合もあつたにせよ、躊躇してしまふような男である（二十三）。

津田は、古風な家族主義的道德から脱却した個人主義者のように見える。だが、彼は他方で月々の生活費の補助を父親に依存して恥じない男でもある。吝嗇な父を説き伏せるために、妹の嫁ぎ先の堀を煩わせることも辞さない。家族や親族に対する義務や配慮よりも、利己的な目的の追求を重んじている点では個人主義的のだが、その目的追求のために親や親戚の助力を恃んでいる点では家族主義の慣行を脱していない。

津田が返済の約束を履行しなかつたために、父は送金を見合わせたが、津田は入院費の支払いなど、予期せぬ臨時の必要が生じたことを訴え、辞を低くして詫びの手紙を送つた。それでも父は送金を断つてきた。お秀はこれについて、「お金欲しい」ためにだけ「謝罪あやまつ」ているから父が応じないのだと注釈を加えている（百七）。実際、津田の父ならずとも、息子が分不相応な贅沢がしたいばかりに、辛苦して蓄えた金をむしり取ろうとするのに接すれば、快く応ずる気にはなれないだろう。送金の途絶は、津田の利己的で個人主義的な生活態度と、親族への依存志向、利己心と依存心の矛盾を顕在化させる出来事であつた。

そもそも津田は、他者に依存することが、欲望追求の土台ともいふべき自由を掘り崩す危険を孕んでいることに思い至っていないようだ。他者への依存が自由の拘束となり、他者からの保護が他者による支配となつて撥ね返つてくる危険を潜めていることは自明であろう。幸い津田の父も

堀も富裕な階層に属しているので、今のところ彼らから難題を持ち込まれる虞はないように思える。せいぜい当てにしていた送金を止められたせいで、軽い経済危機に見舞われたことと、家族主義のイデオログで喧し屋のお秀にがなり込まれ、彼女や実家との溝を広げてしまった程度の被害にとどまっている。しかし津田は、自己の利益と見るや、親族のみならず、たとえば吉川夫人のような有力者にも依存しようとする見境のなさをもつ人物である。彼が、たとえば送別会の席で小林が示した手紙の書き手の青年に似た運命に足をすくわれる危険性は皆無ではない。小説家を志していたその青年は、甘言に乗せられて叔父を頼つて上京したところ、書生代わりとして叔父に顧使される運命に陥り、食うや食わずの悲惨な生活を余儀なくされている（百六十四）。この手紙を読まれたのが、吉川夫人の使嫉に従つて、危険な温泉場行を敢行しようとしている矢先、だつたことを思えば、この過ちのために津田が他者の保護に期待することの危うさを嫌というほど思い知らされる結末が用意されていたかもしれない。いずれにせよ、みずからの欲望追求を人生の課題とする個人主義的な生き方を採択しながら、他方で親族や身の有力者に依存しようとする矛盾が、津田の第一の病根である。この場合、他者への依存心を断ち切ることが健全な個人主義者として「更生」する鍵になる。「手術」が行われるとすれば、当然その方向での「治療」がなされなければならない。

第一の病根に対する「手術」に相当するのは、書き残された範囲では、送金の途絶それ自体と、津田が依存しようとした親族を代表して病院に乗り込み、津田夫婦の利己的な生活態度を弾劾するお秀の攻撃である。お秀は、津田夫婦の急場を救うに足る金をちらつかせ、利己心を悔い改めて、感謝の念とともに親族の厚意を受けいれよと勧告する。つまり利己心と依存心のあいだの緊張を高めることで、前者を捨てて、後者に就くと執拗に説得する。だが、もともと経済上の危機がそれほど深刻でない上に、家族主義のイデオロギーを振りかざすお秀の追及自体が利己心を動機としていることを津田から見透かされていたせいで、お秀の攻撃は最後の一线にまで津田を追い詰めるには至らなかった。財政上の危機は偶然岡本からもたらされた小切手によつてあっさり片付いてしまった。

偶然の解決は、僥倖のように見えながら、むしろ禍根を後に残すものだったと言わざるをえない。お秀と衝突した程度の痛みしか蒙らずに済んだ津田は、内部に抱えた利己心と依存心の矛盾を病として意識することすらなかったのではあるまいか。これ以降、その可能性はあまり高いとは言えないが、父親に経済的に依存することの非を悟つて、みずからの収入だけに頼る、慎ましいながら堅実な生活を歩む方向に転換しえたとしても、同じ病が形を変えて発症することは必至である。第一の病根に対する「手術」がこれに尽きていたとすれば、失敗に終わったと判断せざるをえない。

この節では、お延との関係において津田が抱える病根（第二の病根）を検討する。患部の筋肉の「収縮」は、津田から「芝居へ行く許諾」を得たお延が、「階子段を下へ降りて行つた拍子に起つた」（九十三。「籠の中の鳥見たやうに彼女を取扱ふのが気の毒になつた」（同）津田は、気前よく送り出してはみたものの、手術後の自分をよそにして、喜び勇んで歓楽の場に駆け出そうとする姿に目の当たりに接して、いまいましく思う気持ちを押えがたかつたのであろう。「あたしは不断からあなたがあたしに許して下さる自由に対して感謝の念を有つてゐるんです」（百四十八）と、お延自身が語るように、津田は、当時の男性にしては妻の人格を尊重するすべを心得ているかに見える。が、それは表面的なポーズにすぎず、内部には妻を奴隷視する家父長制的メンタリティを深く根付かせているのであろうか。津田に送り出されて、劇場に赴いたお延の方も、次のような感想をまず心に浮かべている。

手前勝手な男としての津田が不意にお延の胸に上つた。自分の朝夕尽してゐる親切は、随分精一杯な積であるのに、夫の要求する犠牲には實際がないのかしらんといふ、不断からの疑念が、濃い色でぱつと頭の中へ出た。（四十七）

このような一節からは、津田が妻に絶え間のない奉仕を要求する暴君でしかなく、ただ岡本家の人々や吉川夫人の意向を憚つて、妻に理解のある夫を装っていると解釈できなくもない。が、津田の病がそこまで進行しているとすれば、「治療」の施しようもないと言ふべきだろう。

細谷博は、『『明暗』中には多くの人物対照の構図、すなわち〈対〉が見いだせる』と指摘し、とりわけ津田とお延のあいだに「〈相似形〉ともいふべきあり方や動きがある」と述べている。この点を考慮すれば、津田と〈対〉を構成するお延の人物像において、家父長制的心性がどのような位置を占めているかを検討すれば、津田の実態に関する理解が得られると予想しうる。

お延が主体性を重んじる近代女性の風貌を備えているのは一目瞭然だが、同時に女性に要求される家父長制的規範に関しても、これを意外に従順に内面化している人物である。叔父よりも先に風呂に入る叔母のふるまいを、「女らしくない厭なもの」（六十九）と感じてしまう感受性の持ち主であり、先の引用文にあつたように、まめまめしく夫に仕えることをもって、妻の義務と信じて疑わぬ女性である。だが、時代の規範の命ずるままに行動することは、お延にとって手段であつて目的ではない。お延は、奉仕の対価として夫の愛を要求する。夫を「愛する事によつて、是非共自分を愛させなければ己まない」（百十二）とは、お延が事あるごとに心に誓う覚悟である。妻の務めを甲斐甲斐しく果たすことは、彼女の覚悟という、夫を「愛する事」の表現の一つであり、しかも最も頼みにしているところの愛の表現方法であつただろう。夫に忠実であることは、お延にとつて夫に隷属することではなく、彼女自身の理想を達成するための手段にすぎない。

同じ消息が津田の場合にも確認できるのではないだろうか。

愛の戦争といふ眼で眺めた彼等の夫婦生活に於て、何時でも敗者の位地に立つた彼には、彼でまた相当の慢心があつた。所がお延のために征服される彼は已を得ず征服されるので、心から帰服するのではなかつた。(中略) お延が夫の慢心を挫く所に気が付かないで、たゞ彼を征服する点に於てのみ愛の満足を感ずる通りに、負けるのが嫌な津田も、残念だとは思ひながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参するのであつた。

(百五七)

津田がお延を従属者の位置に貶めようとするのは、「愛の戦争」において「何時でも敗者の位地に立つ」ことを余儀なくされている事実を隠蔽しようとする動機からではないだろうか。敗者の屈辱を受けいれるに忍びず、伝統的な規範を楯にして、妻を下位の位置に押え込もうとしているのである。津田にとつても家父長制的規範は手段であつたが、ただし劣敗者の事実から眼をそむけるための手段である。

津田が事実を隠蔽もしくは糊塗しているのは、「愛の戦争」においてだけのことではない。財力の点でも、岡本家を背後にもつお延から見くびられるのを恐れて、「大変楽な身分にゐる若旦那」(百十三)であるかのように装わざるをえなかつた。無理な画策をしてまで父から金を送らせようとしたのは、虚構の「身分」を演出するためだつた。津田の内情を鋭く見破つたお延が、「何故男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出して呉れないかを苦に」し、「仕舞には、それを敢てしないやうな隔りのある夫なら、此方にも覚悟がある」(同)と思ひ詰めているように、夫婦関係における優越者の位置にこだわり、お延と直に向き合おうとしない津田の態度は、夫婦の危機を深めることにしか役立っていない。

さて、お延との関係において津田が抱える病根だが、この場合にも津田の精神が抱える相矛盾する二つの因子を意味するものだとすれば、その一つが妻のお延よりも優位な立場にたつことを欲する心理、夫としての体面にこだわる感情であることは間違いない。自己を優越した位置に置くとする欲求は、自己の利益を求める心理の一つのヴァリエーション変異型と考えられるので、やはり利己心の名で呼ぶことが許されるだろう。では、それと対立するもう一つの因子は何か。この場合にも、先にお延のケースを検討するのが便宜である。

お延は、お秀との談話中、相手の反応から、自分を攻撃の標的とする吉川夫人との同盟関係を嗅ぎ付けた。「知らないうちに重囲のうちに自分を見出した孤軍のやうな心境」(百四十三)に落ち込んだ彼女は、夫の津田ひとりを頼りと恃む思ひに強くとらわれる。「夫を除いて依りたよになるものは一人もゐなかつた。彼女は何を置いてもまづ津田に走らなければならなかつた」(同)。

これと似た現象が津田にも生じている。手術の前日、無沙汰見舞を兼ねて藤井家を訪ねた。そこでは結婚をめぐつて面白からぬ議論をする羽目になり、帰途にはまた、小林の無理強いに遭つて、気の進まぬ酒に付き合わされることになつた。外で気の滅入る思ひを余儀なくされた津田は、家で彼を待つお延を慕う思ひを強くする。

夕方以後の彼は、寧ろお延の面影を心に置きながら外で暮してゐた。其薄ら寒い外から帰つて来た彼は、丁度暖かい家庭の燈火を慕つて、それを目標に足を運んだのと一般であつた。(三十八)

手術を受けている最中、「不安」に襲われた津田は、二階で待つお延の姿を思い描き、「下から大きな声を出して、彼女を呼んで見たくなつた」(四十二)りしている。津田が日常生活を送るうえで堅実に妻の役割を果たすお延に依存しているばかりでなく、精神的にも彼女を頼りとし、彼女によつて慰められ支えられようとする思いを抱いていることが確認できる。堀家訪問の帰りに孤立感を深めたお延が夫のもとへ赴こうとする心理が、「避難場の積で夫の所へ駆け込まうとばかり思つてゐた」(百四十三)云々と説明されている。あるべき夫婦のあり方とは、まさに「避難場」の語で形容されるところのものであろう。夫婦の双方が傷みや苦しみを共有し、共有することで癒される場所であればならぬだろう。夫婦生活がそういう場所であるためには、相互を信頼し、信頼を基礎として依存し依存されることのできる関係でなければならぬ。

津田夫婦の現状が「避難場」の理想から隔つてゐることは明白である。劇場での会食中、吉川夫人から冷ややかな扱いを受けた後、舞台に見入ろうとするお延の胸に、病院にいる津田のイメージがしきりに浮かぶ。

襦袢を着て横臥した寐巻姿の津田の面影が、熱心に舞台を見詰めてゐる彼女の頭の中に、不意に出て来る事があつた。其面影は今迄読み掛けてゐた本を伏せて、此所に坐つてゐる彼女を、遠くから眺めてゐるらしかつた。然しそれは、彼女が喜んで彼を見返さうとする刹那に、「いや疝違ひをしちや不可い、何をしてゐるか一寸覗いて見た丈だ。お前なんか用のある己ぢやない」といふ意味を、眼付で知らせるものであつた。(五十六)

これは、津田とお延の現状を端的に表象するイメージである。津田がいまだに清子に「未練」をもつてゐることを過大に評価して、単に「利害の論理」(百三十四)だけでお延と結びつてゐると考えるのは誤りである。お延自身が期待する程度とはほど遠いが、先に確認したように、津田の内部には確かにお延を愛し、彼女を求める感情が存在する。が、お延がその感情に応じようとすれば、津田は急にそっぽを向いてしまう。妻の愛を素直に受け入れることが、お延の技巧に征服される劣敗者の位置に立たされることと等しいと受けとめられ、夫の権威という城壁を築いて自己を防衛しようとしているのである。夫婦の關係に関する津田の病根は、お延への依存心と、夫としての体面にこだわる利己心との矛盾にある。愛情と虚栄心の対立と言ひ換えてもよいが、第一の病根との対応を重視して、依存心と利己心の葛藤として理解しておきたい。津田が個人主義的な生き方を貫くためには、依存心を切り棄てなければならなかつたが、お延との夫婦關係を全きものにならうとするならば、利己心を捨て、互いに信頼し、依存し依存される平等な關係を構築しなければならない。

次に、津田の第二の病根に対する「治療」がどのようなゆきをたどつてゐるかを確認しておこう。この場合にも、送金の停止とお秀の攻撃

が、津田の抱える矛盾を表面にまで押し出すことに貢献している。送金が絶えたことよって「楽な身分にゐる若旦那」の仮面をかぶり通すことのできなくなつた津田は、勢い素顔のままでお延に向き合うことを余儀なくされる。実際、彼はお延に岡本へ借用に赴くことを提案して、妻に依存する態度を見せる。お延は岡本家の人々に対する虚栄心から津田の依頼を拒否したが、代わつて晴着の質入れを持ち出した。津田はお延の申し出を内心喜びながら、それを敢えてさせることで、「夫の矜りを傷け」（八）られるのを苦痛と感じて躊躇せざるをえなかつた。かくて、夫の体面への執着を捨て切れなかつたために、津田は互いに依存する夫婦関係を構築する最初の機会を逸してしまつた。

お秀との談話中、父からの送金が絶望的だと知らされた津田は、「いつそ今迄の経済事情を残らずお延に打ち明けてしまはうか」（九十七）と考へるところまで追い詰められる。このあたりが利己心と依存心のあいだの緊張が高められた絶頂であろう。この方向にもう少し進んでいれば、少額の金さえ調達できない自己の無力さ、卑小さを直視して、妻に依存する方向に態度を改めていたかもしれない。だが、お秀の攻撃が津田の利己心を衝かなければならないところを、逆にお延の虚栄心を標的にするような見立て違いを犯していたこともあつて、「治療」は思ふような実を挙げえなかつた。それでも、お秀が津田の喉から手の出るほど欲している金を懐にしていたせいで、津田は受け太刀を余儀なくされた。津田が守勢に廻つて辟易しているところに顔を出したのがお延であつた。

お延の入室は、そのときの津田には、援軍の到着に等しいものと受け止められたに違いない。夫としての「体面を保つために」絶えず「武装してゐた」（四十三）彼が、進んで妻の助力を恃む率直さを示した。もつとも、津田のこの変化には、その直前まで「遠慮の要らない」、「親しい間柄」（九十二）にあるお秀を相手としていたために、妹に向けられていた取り繕わぬ自然な態度が、妻のお延に対しても波及したという事情も与かつていたのであろう。いずれにせよ、「平たい旦那様」（百四）の気安さで自分に向かう津田の態度に接したことは、お延に、「久し振りに夫と直に向き合つたやうな」（百十二）印象を抱かせ、久しく忘れていた喜びをもたらした。

お延は津田の変化を、夫婦愛の「復活の曙光」（百十二）と感じるが、確かに送金の途絶とお秀の攻撃は、財力の点で実情以上の身分にある夫として自己を誇示しようとした企てを無効に帰した。しかし、津田の病根が取り除かれるためには、次の条件が満たされなければならないだろう。まず、相互に依存し依存される者として向き合うことができたこの瞬間の喜びを重く受けとめる必要がある。その上で、夫婦のあいだで体面や、相手に対して優越した位置に立つことにこだわらず、利己心と虚栄心を発動させることが、かえつて和合を妨げるとの認識をもたなければならぬ。この条件を満たすことは、「夫の愛」が「自分の存在上」ぜひと「必要」（百五十一）と思ひ詰めてお延には可能かもしれない。だが、「お延を愛してもゐたし、又そんなに愛してもゐな」（百三十五）という中途半端な状態にある津田には今のところ困難と言わざるをえない。

第四百四十五から百五十二回のくだりでは、今度は津田とお延のあいだに、清子に関する秘密をめぐつて激しい攻防戦が繰りひろげられる。この

ときにも、最後には、お延は「久し振に結婚以前の津田」(百五十)が復活したかのように感じて、喜びを胸に満たす。お延がこのとき愛の満足を感ぜたのは、彼女が初めて「愛の戦争」における弱者として津田に相對したからである。自分の優越感が脅かされる虞れがないゆえに、津田は安心してお延に優しく接することができた。彼はお延をいたわる一方で、「畢竟女は慰撫し易いものである」(同)と見くびり、「漸く」お延を「輕蔑する事が出来た」(同)と、安堵の息を吐いているありさまである。夫婦の仲を疎隔させる因子である利己心Ⅱ虚栄心を温存させた津田の病根は根深い。もし津田に「更生」がありうるとしたら、虚栄心を發揮する余地のないほど惨めな境遇に突き落とされ、心からお延に依存する気持ちを起こさせるような機会に出会するときであろう。

この節の最後に、前節も含めてこれまでの成果を確認しておこう。第一の病根は、津田の個人主義的な生き方に関わる。津田は、彼自身の欲望の追求を最優先する利己心にとりつかれながら、同時に親族や有力者に依存していた。病根は利己心と依存心の矛盾・葛藤にあり、後者を切り棄てることで、個人主義者として健全な道を歩むことが可能になる。第二の病根は、お延との夫婦関係に関わる。津田は妻に対して優越した位置に立とうとする利己心Ⅱ虚栄心にとらわれ、妻に依存しきれないでいる。そのことが夫婦関係を冷ややかなものにする原因になっていた。第一の病根と同様、利己心と依存心の矛盾・葛藤が病根のだが、第一とは反対に、前者を切除することで津田夫婦は近代的なカップルとして再出発を遂げることが可能になる。関谷由美子は、『明暗』の人物関係が「シンメトリカルな造り物めいた配置図となつて」⁹⁾いることを指摘しているが、「人物関係」のみならず、病根と病根のあいだにも、同様の「シンメトリカル」な構図が貫かれている。

三

津田の患部の筋肉が三回目の「収縮」を起こすのは、小林が清子に関する情報をお延に漏らすのを恐れたときである。この津田の反応自体から病根の内実を読みとることは難しい。単に第三の病根が清子の存在に関連しているのを確認するにとどめておこう。

清子にまつわる病根を抽出する役割を負うのは、満を持して病院に乗り込んで来た観のある吉川夫人である。夫人のメスさばきは実にみごとで、津田の「弱点」が「一皮づつ赤裸あかはだかにされて行く」(百二)趣がある。が、夫人には津田に対する身最負があるためか、彼の抱える問題を露呈させながら、それを病氣と認定していかないかの如くである。かえって罪をお延の方に見出し、彼女に対する「療治」(百三十四)まで口にして¹⁰⁾いる。確かにお延の方にも、「療治」されるべき病根は存在するが、津田に比べてそれほど深刻とも思えないし、「大きな自然」(百四十七)の力で着々と治療の実を挙げているかに見受けられる。名医さながらのメスさばきを示す吉川夫人も、偏見のために見立て違いをしている気配である。

津田の第三の「奥の奥」にある病根をはつきりと指摘し、病気の診断を下すのは、冒頭に登場する医師と同じ姓をもつ小林である。小林は、津田が「余裕に崇られてゐる」、「余裕が君をして余りに贅沢ならしめ過ぎる」（百六十）と言う。小林の批判は、欲望を野放図に解放できる境遇にあるために、かえつてみずから苦しめる結果を招来しているというパラドクスに向けられているかに見える。大学を卒業していながら、勤め先から支給される給与だけの生活に甘んじず、実家の財力を当てにして、かえつて厄介の種を蒔いた、送金途絶事件の顛末などに当てはめてみることもできるだろう。ただ、小林は、「君は今既に腹の中で戦ひつゝあるんだ。それがもう少しすると実際の行為になつて外へ出る丈なんだ。余裕が君を煽動して無役の負戦をさせるんだ」（百六十）とも指摘している。今生じていることと言へば、清子の待つ温泉場へ赴くことと考える他ない。清子のもとへ行くことが「余裕」に駆り立てられての、自己との「戦ひ」であるとは、どのような意味であろうか。

吉川夫人は、鮮やかな心理分析によつて津田がいまだに清子に対する「未練」を引きずり続けていることを示した（百三十九）。夫人の見方に従えば、津田の温泉場行は、「未練」に誘い出されての旅であり、その目的は「未練を晴す」（百四十）ことにある。清子から捨てられた理由を聞き出し、執着を断ち切れというのである。小林が病と見るのは、まさにそれをなしない点である。

小林の言う「余裕」とは、事実直に直面しないで済ませられる境遇にあることを意味する。順境にあつて、自己を否定する事実に向き合つたことのない人間は、実態以上に自己を尊く考える傾向にある。何かのことで蹉跌に直面したとしても、別の方面で自信を回復することができるなら、当初の誇大なアイデンティティを修正する必要に迫られないかもしれない。手前勝手な合理化を施し、蹉跌を蹉跌として受けとめないで済ますこともできるだろう。津田にとつて清子の一件は、紛れもなく蹉跌の体験であつた。彼は、自尊心を毀損するこの手痛い事実と正面から向き合つてきただろうか。津田は、清子から捨てられた理由を、「今でもまだ考へて」（百三十九）いると言う。吉川夫人はそれを津田の「未練」と認定するが、津田が考え続けているのは、失恋事件を否定的に受けとめないで済むような理由を求めてであり、自己のアイデンティティを無傷のままに保つ根拠を見出そうとすることではないか。温泉場で清子と会うことで津田が秘かに期待しているのは、事実から眼をそむけ続けようとする自己欺瞞を正当化する理由を聞き出すことであつたろう。津田が「余裕」に駆り立てられて「腹の中で戦ひつゝある」という小林の言葉は、恵まれた境遇の中で育てられた優越者のアイデンティティを保護するために、否定的な事実との直面を避ける口実を探し続けているという意味である。

小林は、温泉場行が「無役の負戦」だと予言したが、書き残された範囲でもこの予言的中していることを確認できる。温泉宿で津田が「夢中歩行者」（百七十七）のごとく彷徨している最中に、突然清子と再会する。諸家の指摘があるように、「この突然の出会いは、出会と別離という形の相違はあるにしても、その本質においてかつての津田と清子の突然の別離の再現」と解釈することができる。清子は階下に佇む津田を眼にして非常な驚愕に襲われたものの、忽然と背を向け、廊下の灯を消して立ち去つた。「凡てが警戒であり」「注意であり」「絶縁であつた」（百七十七）。

にもかかわらず、その刹那の清子が「蒼くな」り「硬くなつた」ところに「望みを繋い」で「己惚の頭を撫で」(同) ようとしている。病膏背に入ると言うべきであろうか。

津田の第三の病根は、事実との対決を避けて、優越者のアイデンティティを保護しようとする点にある。この場合の矛盾する因子とは、津田の内部の己惚れに満ちた自己像と、外部にあつてそれを脅かす事実である。その点、利己心と依存心という内的因子どうしの矛盾で構成された第一、第二の病根とは、やや性格が異なる。加えて病根の位置する水準の点でも相違する。第三の病根は、「奥の奥」、つまり他の二つの病根の基底にある。第三の病根が「根」であり、第一、第二の病根はそこから派生した「枝」に相当する。したがって、「根」に当たる病根を「治療」することさえできれば、他の病根はおのずから消滅することになる。

第一の病根とは、津田が他者との関係において利己心と依存心の矛盾を抱えていることであつた。津田が父や親族に依存することも恥じずに奢侈な生活を送ろうとするのは、優越者のアイデンティティに対応した生活水準を要求する資格があると思いがつていからである。お延を満足させることもできない資力しかもたない事実を直視し、その事実をアイデンティティに組み込むことができてさえいれば、父の財力に依存することもなかつただろう。また、勤務先の会社でさして重用されるほどの立場にない事実を承認する勇気があつたならば、吉川夫人の機嫌をとることよりも、仕事に打ち込み、社内の地位を確実なものとするので、アイデンティティの向上をはかる方向に努めていたことだろう。妄想の上に立てられたアイデンティティにとらわれ、事実を直視しないゆえに、他者に依存しようとする誘惑を断ち切れないのである。

津田の第二の病根は、お延との関係において、利己心と依存心の矛盾を抱えていることであつた。津田がいくつかの方面ではお延の下位に立たざるをえない事実を率直に認め、その方面ではお延に依存する態度に出ることができたなら、彼らは尊敬と信頼で結ばれた良き夫婦となりうるだろう。根拠薄弱な優越者のアイデンティティを放棄ないし下方修正する用意があるならば、津田は妻の人格を尊重する夫となり、彼ら二人は平等な資格で結びついた近代的なカップルとして出発することも可能である。

事実に向き合い、事実に基づいたアイデンティティを構築することは、津田のすべての病を根治することにつながる。

ところで、津田の第三の病根に対する「手術」は成功したであろうか。彼の抱える矛盾は吉川夫人と小林によつて余すところなく摘出されている。「手術」が可能だとすれば、「己惚れに満ちた彼のアイデンティティに破壊的な影響を与える事実を突きつけることを通してであろう。書き残された範囲では、過去の絶縁を再現するかのように、津田を階下に見捨てたまま立ち去つた清子の振る舞いがそれに相当する。だが、先ほど確認したように、この出来事に直面しても、なお津田のアイデンティティは無傷のまま維持されている。

これまでも注目されてきたが、清子との不意の再会を語る一節には、変則的な視点が持ち込まれている。「階上の板の間迄来て其所でびたり

と留まつた時の彼女は、津田に取つて一種の絵であつた。彼は忘れる事の出来ない印象の一つとして、それを後々迄自分の心に伝へた」(百七十六)とか、「棒のやうに硬く立つた彼女が、何故それを床の上へ落さなかつたかは、後から其利那の光景を辿るたびに、何時でも彼の記憶中に顔を出したがる疑問であつた」(同)とかの、傍点を付した箇所がそれである。この二箇所には、この場面を過去として振り返る津田のその後の視点が導入されている。後の時点から回想して、再会時の驚愕のイメージが最も強烈な印象を残したとすれば、逆に言えば、清子と温泉場で過ごす期間にこれ以上に心に強く刻まれる出来事に逢着しなかつたことになる。この後、波瀾に富んだ曲折があつたならば、このときの印象が薄められてしまい、「後々迄自分の心に伝へ」ることもなかつたであろう。だとすれば、津田の与かり知らぬあいだに——たとえば、病気を再発して寝込んでいるあいだに、関から「電報」(百八十八)が来て、清子が再び不意に津田の前から姿を消すといった構想であつたとも考えられる。いずれにせよ、津田の第三の病根に対する「手術」に相当するような出来事がこの後に生じたとは考えにくい。第三の病根が絶えず清子の存在と結びつけられていたことを思えば、清子が関与しない形で「手術」が成功裡に行われることはまずありえないだろう。津田の未来は暗い。

前にも触れたことだが、温泉宿の廊下での不意の再会が過去のアナロジーであることは少なからぬ論者の認めるところである。が、このアナロジーの含みもつ可能性が十分に展開されているとはいいがたい。アナロジーを最大限にまで拡張すれば、過去の突然の別離の真相に見通しをつけることも不可能ではないと思う。

廊下をさまよっている途中で、津田は洗面所に流れ落ちる水に氣をとられて立ち止まつた。その傍らに鏡があり、そこに映つた津田の影は、日頃の光彩を欠いてひどく醜い相貌であつた。津田が見る影もない自分の鏡像を認めて髪を整えなどしていた直後に清子との再会が不意に訪れる。津田の容貌がいつになく見苦しく映じたのは、手術後の経過が思わしくないことを示すものだろう。日頃慎重な津田に似ず、医者に相談もせず温泉場行を断行したこと(百五十三)が良くない結果を来たしたのかもしれない。清子は醜く病んだ津田を目にしたことになるが、そのとき彼女の眼に映つた姿は、そのまま過去の津田でもあつただろう。清子はすでに津田が病んでいること、病んだ醜悪な本性を隠していることを認識したからこそ、突然彼のもとを去つたにちがいない。

清子が認めた津田の病がどのようなものかは後に考えよう。温泉宿で階下に佇む津田を不意に見出した清子は、卒倒せんばかりに蒼ざめ、硬くなつたが、それはかつて津田の病気を発見したときの驚きをそのまま再現したものだろう。「信と平和の輝き」(百八十八)を宿した眼で津田を見上げ、「自分に解らない未来を挙げて、彼の上に投げ掛け」(同)ていた清子は、津田に信頼を寄せる気持が深く真実であつた分、それだけ強い衝撃に見舞われなければならなかつたはずである。再会時、ショック状態から目醒めた清子は、たちまちきびすを返し、下女の助けを求めて呼鈴を鳴

らしたが、これも過去の再現であつたかもしれない。彼女が関と突如結婚するに至つたのは、信頼を裏切られて津田から蒙つた心の傷を癒そうとしてのことだつたと思われる。津田が傷つけられた自尊心を立て直そうとして、お延の愛を受け入れたことと対応する過程が、清子と関の結婚にも存在したと想定することは、「シンメトリカル」な構図に従つて人物関係が布置されているこの小説の性格を考えれば、不自然ではないだろう。

清子の存在が過去の再現だとすれば、再会時の津田の行動も過去の再現でなければならぬ。とすれば、「夢中歩行者」のように人気のない夜の廊下をさまよう「常軌を逸した」(百七十七)行動は何を意味しているのだろうか。石崎等は、再会時の清子が男性の欲望を挑発するエロチックな風情を濃厚に漂わせていることに注意を促し、『派手な伊達巻』や『長襦袢の色』への(津田の引用者)エロティックな関心はなみなみならぬものがある」と指摘している。「津田の解放的な『欲望』は、横浜の生糸屋の細君の『長い襦袢の派手な色』(百七十四)に刺激され、それが清子の肉体に纏われた『寐巻の下に重ねた長襦袢の色』へとストレートにつながっている」とも述べている。石崎が「横浜の生糸屋の細君」と言及しているのは、津田が使つていた浴室にそれと知らずに足を踏み入れ、「白昼なら人前を憚るやうな慎しみの足りない姿」(百七十四)を露わに示して去つた人物である。その女性の目には、「温泉烟の中に乞食の如く蹲踞る津田の裸体姿」(同)が映つたと記されている。「乞食」は津田の飢渴を暗示する表現である。この後、宿の廊下をさまようことになる津田は、明らかに性欲に促されていた。浴室で女性のエロチックな姿態を目にした彼は、露骨に言えば獲物を求めてさまよつていたのである。津田はたまたま通りかかった洗面所で蛇口から絶え間なく清水が流れ降ちるのを目にする。日常使い慣れた水道のように、「栓を締めて置」(百七十五)く必要のない自然の流水であつた。この水は、抑制を加えられないまま、津田を引きずつて、人気のない廊下をさまよわせる性欲のメタファーである。もちろん、高尚なエリートの自己像にとらわれた津田当人は、自分が性欲に導かれているとは自覚していないが、この夜の「夢中歩行者」のごとき行動は、彼が温泉場に行つてきた深層の動機をも語つていようだろう。

先ほどの生糸屋の細君の連れ合いの風貌には、翌朝津田が一瞥した印象では、お秀の夫で、放蕩家の堀庄太郎を連想させるものがあつた(百七十八)。前夜の不行跡からいつて、津田が第二の「堀庄」になる可能性は皆無ではない。今のところ周囲の眼を憚つて「品行方正」(百七十九)の名を博しているが、「今の君は決してお延さんに満足してゐるんぢやなからう」の小林の問いに、「だつて世の中に完全なものはない以上、それも已を得ないぢやないか」(百六十)と答えているのを見ても、津田には漁色家の素質がある。妻には貞節を要求するが、夫の性的放埒に寛容であるのが、夫婦の性に関する家父長制的通念に基づく慣行である。やがて津田は、この通念に依拠して、性の方面でもお延に全面的に依存することをやめて、利己的な欲望を追求する方向に転じるのではないだろうか。依存心と利己心Ⅱ虚栄心の矛盾を抱え、後者にとらわれ、前者に徹しえない点に津田の第二の病根があつた。津田はお延に対して劣勢に立たされている事実を受けいれられず、逆にお延を疎んじる気持を強め、伝統的な通念を楯に色を漁り、お延への腹いせとするような行動をとるかもしれない。いずれにせよ、夫の愛を求めてやまない妻を残して美貌の昔の恋人が逗

留する温泉場に出かけるといふ行動をとつたこと、あたかも遊廓の中かなんぞのように、渴した心を抱いて夜の廊下を彷徨したことは、第二の病根に発する未来の病を予示するものと言えるだろう。

ところで「乞食」の語は、他の箇所にも現れる。第十三回には、父からの送金が絶たれ、当座のやりくりに窮した自分の立場を「乞食」と「懸隔」のないように感じたというくだりがある。この場合の「乞食」は、金銭に渴した津田の心を表す語と言えるだろう。どうやら『明暗』においては、性に対する欲望と金銭に対する欲望は等価なものと位置づけられているようだ。吉川夫人は津田にとつて金銭欲の充足を約束してくれる存在だが、「男女両性の間にしか起り得ない特殊な親しみ」(十二)を感じさせる女性でもある。夫人が歪んだ性欲に慰藉を与えていることは、金銭欲と性欲の等価性を裏付けている。だとすれば、温泉宿の廊下を右往左往する津田を促していたのは、金銭欲でもあつたことになる。藤井の叔母が「心が派手で贅沢に出来上つてる」津田を、「始終御馳走はないかくつて、きよろしく其所そこいらを見廻して人見た様」(二十七)と評し、津田が「ちや贅沢所とせうか丸で乞食ぢやありませんか」と応じる箇所もある。廊下をさまよう津田は、「乞食」さながらに、「御馳走はないかく」と「其所そこいらを見廻して」歩いていたわけである。

津田の第一の病根は、利己心と依存心の矛盾を抱え、後者を切り棄てえない点にあつた。危険を冒して温泉場まで来た要因の一つは、金銭欲に目がくらんで吉川夫人への依存を脱却しえないことにある。温泉場行は夫人の勧めであり、彼女の機嫌を損ねることを恐れて断りかねたのである。欲望に引きずられて夜の廊下をさまよう津田の行動は、第一の病根ゆえに抑制を失い、権力者のちらつかせる餌のありかを嗅いで回るあさましい姿を集約的に表現するものでもある。

津田をして温泉場に駆り立てた要因の一つが第三の病根であつたことはすでに確認した。津田が温泉宿の廊下をさまよつたのは、自分の部屋を探しあぐねてのことであつたが、帰るべき場所を見失つて、あてもなく闇を彷徨する姿は、本来抱るべき、事実立脚したアイデンティティを喪失して混迷を深める病んだ津田の姿を象徴するものでもあろう。津田は三つの病に冒された姿を清子の目に曝したことになる。清子が激しい驚愕に襲われたのもつともである。と同時に、かつて同じあさましい姿を目にした彼女が、身を翻すように津田のもとを去つたのも、賢明な判断だつたと言ふべきである。

〔付記〕 本稿の主題からいって、お延の病根と「手術」に触れえなかつたのは、致命的な欠陥と言わざるをえない。身辺の事情に妨げられて忽

卒の間にまとめることを余儀なくされたために、時間の余裕を得られず割愛した。他日を期して補いたい。

注

- (1) 『明暗』の構成〔『漱石襟記』昭10・5、小山書店〕。以下、小宮への言及は同じ。
- (2) 『明暗』論〔『夏目漱石』昭31・7、修道社〕。以下、唐木への言及は同じ。
- (3) 「則天去私をめぐって」——『明暗』と則天去私の関係〔『近代文学鑑賞講座』第一巻、昭33・8、角川書店〕。ただし、引用は、『漱石作品論集成』第十二巻（平3・11、桜楓社）に拠った。
- (4) 『夏目漱石論』（昭51・6、勁草書房）の第V章『明暗』の世界・仮構の倫理。以下、梶木への言及は同じ。
- (5) 『明暗』（『夏目漱石』——『明暗』まで』平10・2、おうふう）。以下、内田への言及は同じ。
- (6) 『明暗』の面白さ、わかりやすさ〔『凡常の発見 漱石・谷崎・太宰』平8・2、明治書院〕。
- (7) 「津田の〈余裕〉、『明暗』のおかしみ」〔『凡常の発見』〕。
- (8) 吳敬「漱石文学における家族関係」——『明暗』の場合〔『文芸と批評』第9巻第5号、平14・5〕や増満圭子『夏目漱石 漱石文学における「意識」』（平16・6、和泉書院）の『明暗』など。
- (9) 『明暗』の主人公——心トイフ舞台〔『漱石・藤村 〈主人公〉の影』平10・5、愛育社〕。
- (10) 吉川夫人がお延に厳しく当たるのは、夫人に反旗を翻して津田のもとを去った清子に対して抱く苦々しい感情がお延に投射されるからだろう。お延と清子は、相次いで津田を愛したという共通点があるうえに、吉川夫人の権力に帰伏しない主体性をもった女性である点でも共通する。
- (11) 清水孝純『『明暗』キーワード考——〈突然〉をめぐって』〔『漱石 その反オイディプス的世界』平5・10、翰林書房〕。佐藤泰正『『明暗』最後の漱石』（『夏目漱石論』昭61・11、筑摩書房）や加藤二郎『『明暗』論——津田と清子』（『漱石と禪』平11・10、翰林書房）などにも、同じ趣旨の指摘がある。
- (12) 『明暗』における下位主題群の考察（その二）〔佐藤泰正編『漱石を読む』平13・4、笠間書院〕。